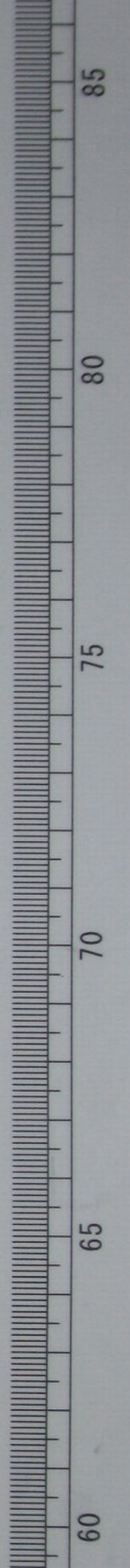




善あけの巻
乙

特 別
14
3157
5



14
3157
5

續おゆ鳥

秋之部



闇さぬくは秋の月 流る星の光 道立
世のちかすあはれも 星のつねに 八田氏 亀友
君へよめ只一筋なり 阿戸の河 万容
きまらぬを夫婦とてらや 伊奈の
ほしきや 晴るや 天乃川 志慶
しもの葉の露や 銀河のこほり 自笑
己にたあし 今宵とぬゆらもの河 鷺倉

夢の回びりしをほりの契を龜の
ほり谷乃とれおいありよの星 左緒
衆の寝て去る百里ありの河 白石
龍乃長柄もやちほり一夜 大魯

洋丸焚香のついであり誰も
はかるおとる例のさうり
つゝおとるそいともいふや

旗の系子硯をのりし墨の朱異 無腸
あけいかりあゆみ星は心のり二打
よみうをいづる星のし向なり 几董

たれも常るおとるはれり
はしをさかす美角定雅の
二子も衣後とも

美角

六日この世のこゝろをほりし系

うはまゝ新踏ふ月の青の色 几董

車押廣る 夜あつさくし 定雅

借もて佩る太刀の幸しを 角

餅買あて酒のむくをいささき

あをさへおとる市のがらり 定

とこは乃よ斬んかひし石佛 角
腕のさぬ入血一汗は 十
こぶちの幾くせざる筆とて
あり明の灯のさおるよ黒 留
あやしくし竹のさぬの音すし
鳥羽田の沼を移り下り飛 十
百姓の心を深に家出して、
只さうくと書の白きう歌 定

ういさのありぬむしりの標く 角
圃しよのふりしぬんぬの 十
舟のたむさむをも鹿坂の下 定
大なる通のまもるえ 留
子にさるよとるよ中流を織は舞 十
多たあし人のまもるよ 定
卯の盛の家よ岩のつて 海
世らういもさういせうのぼる 十

下三
年のちきき醫者の娘と云ふキ
たうう然暗く雛の眉りく 白
中比ふ中比ふ高ししのむ暮り 定
武者六七騎 門りりりキ
的籠を夜半 ちの手はて遊ん 白
二月を菊の中 ぬに村雲 定
橋にけり舟の入来るお汐にキ
舟うそ寒さし旅か水何と 白

ひるまを女ぬるもの志のいげ 定
赤龍三番 けうけうりりキ
淨燭の風よぬいぬぬの花 白
老あき蝶のねをさきて 定
衣のたふを食僧の連長りキ
他の國ぬる 伯夷 叔齊 華

遊相國寺

大魯

秋の夜よのきく 宿直の
月 簾 肉 花 風 の ひびく 九 蓬
さうし乃 雨の 氣の くるく 大
は 黄 帝 の 酒 の 白 の 尾 の けし
早 しの といも 香 あり きた 九

一群の 一向宗 徳 京の けし
かほよき 女らんを かくと 大
待 荒し 傾城 町の 夕日 光 九
とくして 夕し 文あり ともむ 大
田 野に 居ありし ともむ 九
心 雨を 山を かくと 九
舟 喧嘩を ともむ 僧 出 九
病 ありし ともむ 僧 大

とある時 嘆の福文のけすたり
なやいつと 元日乃晨 大
露水を思ふ 汲宿の花の春ル
着ふりし 衣のけす 油 大
お御あて 又あさす 鏡の
世々とも 念りし 壁主の所心 大
墨少の 寒夜の 外面ある 大
鏡の 願よと 泣く顔 大

(下五)

又持ぬと 乃のけす 大
長者の 心むの けす 大
定徳の 里の 牛の 大
新の 山を けの 大
入月を 出る けの 大
けの けの 二位 殿の 大
土黒を けの けの 大
けの けの けの 大

(下五)

白雪くちし 水石宮流すたよき大
前の國目のゆらき 立寄く
痛申たり 及びぬる音よみえ
葉子 乃 母よ志ぬるおつり
向のむも暗あえ 咲ん粧いり 大
ニ番 烏の かなとて 春心

立秋

秋のつらさのちも ありのほく 千代
雨のふりよに 秋の目し くらり 老古屋 斗拙
あつしよの舟も 秋の 徳程 戸 露原
たぶのかさ びく 着る 墓より 斗陰
あは 庵 草の ちよ くらり 法 家 斗
あは 世や 庵 草の ちよ くらり 斗 也有
あは 世や 庵 草の ちよ くらり 斗
あは 世や 庵 草の ちよ くらり 斗
あは 世や 庵 草の ちよ くらり 斗

舞やぬ星はさる 甲下 巻
唐落し物おが法し 蚊屋の外 中葉
影をたの島おあもの 茶の湯に 左様
島おあや踊るく 月のむう 顔 几童
ひくさ夫の鳴田さし 窓をひ 窓付
ねの舞しし

いよ袖うしよ 舞舞の踊り 斗文
いよいよ 拍子のあし 百池
いよいよ 踊るあし 舞水

踊る人のいよやれ の 園 定雅

自適

三十をそのばめをすものいよ 道立
踏をうし 曲十を越せ 相撲取 羅川
川 踏しおをあやすものいよ 大祇
竹は心アくやあえんや 魚カド 士喬
アくくふくくやわくや 勝相撲 几童
乗あけの勇力あきつし 山の山 旧園
負あひぶ角カを 藤おくく 甚村

おく家のとほほくはらう桔梗出石有橘
ほろほろ中一もまきなをたかや
雪弓
あの日もいそひ合らる女もふ
九湖

憶鬼母貫

さくらさきの結ぶ種もあつた戸 芙蓉
待たさういそひ又供ひしきこるふ 霞東
あはれもやもやもあつた袖もあつた 家正

刺殺の人のや

むねもあつたさあつたさあつたの種 賀瑞

おまのうばらひん風人を吹 樗良

夕月も誰やう志 萩のぶ 美角

おぼろしくおぼろしくおぼろしく 稀色

小車のおぼろしくおぼろしく 東壺

病をたして出づおぼろしくおぼろしく 茶列

おぼろしくおぼろしくおぼろしく 相雨

一日の業とくの中

生垣もいそひあつたあつたあつた 正白
お心の人がいそひあつたあつた 路史

了るれ眞やいさゝかきつてしづ 竹裡
よ縁とる大和河丹入りまゝの 霞夫
秋のをけしつるはいつの日暮しり 名吉ヤ 亜滿
鳥の草とら何とてやう秋のあき 眉山

河邊道途

エミふる唄り散みくちかたみ 土川
ふ火ちるふ志の心の思乃んぬが 白堂
花火はく美人の酒はあ投らん き重
物替つてあやうの遠ぶかゝ舟 葦村

利酒も酔あつてもさるや秋の市 十郎 岸央
又う酔 衆の新酒のうけさ 白波
八月に釣の口で魚の店 サガ 喜水
紫のいしこも揚やさしあらし 田園

郊外

牛蠅ははをこのみつあまの風 袴竹
振上り我も征りつあまの風 桃喬 十三
烟をすくともく火あまの化ぬ 乙総
秋の風芙蓉の館をたをさる 莫太

舟待て背戸もさうれは我の言 一鼠
戸口より入 影さぬ我の暮 青蘿
こよわれ日のもよもし我のこれ 西谷
大寺や僧もを流あふらふ 山肆

清光

常の草乃甲よりけあは月 標良
名方の君も逢はらう病を病 大旅
けあは月圓さくわはあは月 我則
宿鳥や曉りけこらあのみ月 万容

良夜訪ふはもあはは月をいふ

中くくし 獨るはさは月を交 蕪村
舟のれで二るさふのを河のあを 無腸
月が秋の如思ふあめなんのりれ 道立

湖上眺望

あは月や辛味あは松をさこのは 几董
十とあやをさくし 黒谷真如堂 青雨
黒谷のあは月をさくし 夫
流るるしあはあは月をさくし 曉臺

物毎の満るるのや十三夜 宋阿
 存りしを思ふに思あり 北堂 白居易
 明堂や月夜ぬるるのや 陶潜 士巧
 巷りて松の脊を指し 唐詩 守一
 啼夜して夢のそらちる 郭守文 後元 曹文
 松のやもくたさるる西乃對 弄我
 ニツ玉くくのや 種く 生佛
 がしるよのそらちる 丹波 田 野菊
 雨のぬれぬるのそらちる 野菊

二三下人の言をよしや 落し 月溪
 からしりて山田實のりぬる 几蓮

旅中佳節

馬の脊のうさぎを移竹
 盆のよめるそらちる 菊の登のぬる
 ちかぢる山路の葉のぬる 几蓮
 其中しりて白菊の先を同をり 月居
 佛壇の十日の菊乃 几蓮
 雞のよめるのそらちる 佛堂 御風

けいけいハ始終を花の盛りも 徳野
えぬれ露や門口のつきの影も 文皮

敬老杜擣衣

よりの夜も我夜ほろろ 佐々木 大曾
先くつら月夜の時なきぬれ 菊尹
雨をわく出ささつら 鳴鳳
わが宿隣の少年 疾りたり 春蛙
くまの心を心もささくさぬら 正白
ひとのまゝ 漸馴る夜の色も 未蓬

夏我よこさぬころ今ハ又止こ 蕪村

秋聲

途垣乃町や針研く指す秋ハ董
層々し露も玉指半しとありたり 我則
秋寒を背戸の草庵佛の目 嵐甲
あふりぬ弥入着る指をさす 月居
雅子のともも上げちる夜長は 士川
秋の戸も倚れ袖乞の鼓もぬ 鐵僧
秋もをわするるある鹿の舞 松宗

於金福寺興行

丘白

ともの火ふきし〜くちりしお集り

書をよも窓の雨間の月松宗

おのゆり鶴おもを鳴ぬん道立

旅のめさむる業とまの赤白

猛電の鯛の漬物お空〜とん董

お殿け〜のお持〜む立

春ゆよからに衣紋を吹ひる白

ちや〜らん霞む島系乃口董

〜お悉の果やと食のお程し立

誰の佛の乃〜入〜ぬ白

世のつれ〜い〜れ五位のゆきゆき董

車よ月の新〜むまて立

お虫の色あ〜り〜れ海草性白

平家語り〜人消〜ぬ董

武者彼は我必遠くさあつ
 立 聲 揺らがる身を遠く
 白 元鳥子いり菜を暇に賀振ぬ
 宗 虫の糸深く和琴を鳴る
 立 にもらや加茂の川原を歩けり
 白 市乃故とやいす法の身
 董 松の戸の妙ある歌を聞けり
 立 葎の垣ふ二筋の路
 白

けみいこゆる草鞋を重く履き
 董 つつさあまのりの飲物よ酒
 立 あぬを梓のころよりけり
 白 月隣りの中のおかし
 董 蝶をうひ雪の降日あがり
 立 瘰疽いこゆる顔のさな死
 白 こそ花をゆきせぬたは
 董 こそ一葉のゆめ葉も
 立

此こそ學乃んたるあしとさ
白

田舎歌舞妓の昼のよは
宗

やろのあゝぬ恋はさふく
董

鼻の神さくすあ指の君
白

入日はあざしゆもきし花の陰
立

長柄の傘をひくかゆふ
董

曾久安計可良壽

おのの命

とゆふ所の世すまのきれは
蘭臺

お輝るはつたのらの初時雨
正白

智入の音月ゆし神と花
鐵僧

おれはさる室所から初時雨
几董

宵くの石もさし初しれ
我則

天の雲をささくし時雨
几董

おの命はささくし時雨
末阿

嘆風の小春都の道きしるゝあ (下五) 霞夫
初づや兵庫の魚あ何くと 白波
州の甲のこころもあ六月 赤雲

返景

冬よみやさしやま川の夕鳥 定雅
舟暮ふ淀舟くちや枯をもち 几重
岸の音深くも入るはをり止 名古屋 事紅
一むらり芋ほすちのあ構 万代
唐新禱のまのあまや女形 太紙

姑の鬼もるはら十あかぬ 下巻 雨袋
姑のあし泣ぬささか姫子 かこ 半捨

夜坐

思ひ折ししこころの夜のゆゆ 無腸
我のゆらうちせのゆらふゆら 菰村
紅国の足あつともよ政ゆのま キ重
関やのゆらるうこまはゆ 出石 東季
牛賣のよこもあつこころ し総
飛鳥をこし袖の下の歳あま (三) 管島

るるあめは猶もさきさきか
かへも散日か知れはあり
く向い嗚の清ら雲おとす 瓢子
九胡 守大

老懐

うらごと生くもおや蟻蟀 二柳
舟なごし新の雲乃きり 雲天
谷おしてんや雲松の山うつ 由氣
霜の月漁村は地へ沈まらう 一音
雲の歎す蟬聲を握りたり 大魯

洛東乃正何所り
橋上より一をり

曉甚

日の影や雲をうつら夕眺
くのもよるにその影に董
の酒を賣婢の歎ありて我則
胡の國へ書ももめ去 蕪村
牧を出てゆく秋駒乃月をまよ一音
あはれしるは草もさる原 則

美の糸九世の御代に拜し置きたる村
世のちから人の世に(借) 臺
かしのいよみを薫らばあやん 音
は一居らうよたさるるを 則
月よせたり隣りの蔓れあやう 董
加持の奇特の帛をたきぬ 音
後世ある草あきく(庵)を 則
罪もろびくよ有職のまふの村

龍襲といふもの進めし雨の日は臺
法の因こり(大事)に 董
花の客横ほの寮に雛持え 音
丁みき(穢)ある透垣の下 則

巻半(あ)は風あはき
はねぬ神のいささく
各ち(あ)きし(事)は(あ)ら
五巻

み

冬を待つ雪の如き
我々の声も
世のゆく陰も
百のゆく
難切の
裸を

下略

雪の消れ
初雪
雪の
雪の
雪の
雪の

或時文の

大雅堂

雪の
雪の
雪の
雪の

けりありて
その情月並にまほしき御
雪の出し雪はるかに花は
雪のまじり馬もひまじり
弄我

梅菴

紫ゆめは日江の入水のまじり
水鳥のまじり並に
後まじり足をぬきし
おのちやまじり
氷らりすれまじり

切らぬ花の招き
えりまじり
用水の用も
霞東

初行

松の梢は江の
おのちやまじり
皮剥の葉も
よるまじり
よのまじり

おろしきも若

河川の底

移り

内法の権りもいひつとるはせり 几主

西のそひりもいひつとるはせり 蕪村

病後

かゝ蛙を煮つて 我皮肉をか 曉臺

乾鞋や煮る分つ響あり 蕪村

雪國へ帰るの女もいひつとる 田福

夜を好む我も癖ありはるか 定雅

煮凍りや格子のいひを 徳徳月夜 雁岩

煮凍りや精進ある種の時 寺重

月吉のももを煮るの白く 海蔵 士巧

いこゝろに弦伝ふもいひつとる 月居

蛇喰ふ酒呑下戸の思ふれ 太祇

穀喰ふ味住もいひつとる 嵐山

對僧

佛燻しさうの慈を煮るは 道立

神もいひつとるは 家足

宿もいひつとるは 神押 標

舞いあそぶおのゝ 心を宿りて可也
四寸のうしろに替やうやぬり月 石友
冬も五月骨籠りて入るは 几童

野行

ゆくゆく師走日や夏の火 集馬
水辺をゆくは走の埃あり 几童
寒も梅や雪のうらみ花のうらみ 葵太
善悪や文貫行よちよちんは 優才
うらみのうらみ手探りうらみうらみ 百地

家の心の酒ゆるしゆくきさる 土壽
酔も白師走の市あつたり 葵
まよひも貫きのむらりやうらみ 正名

年月 ちやのの葉道をおし

とくの肉のあつる春の日の出の 袖女
とくの肉のあつる春の日の出の 田女

陰夜

まよひゆくはあつる夜の化粧あり 几童
まよひゆくはあつる夜の化粧あり 葵

こゝろのまはるるに 國のまはるるに
しるしをたづねて 舟をたづねて
舟のまはるるに 舟のまはるるに
十よりのまはるるに 舟のまはるるに
世の舟のまはるるに 舟のまはるるに
何れもまはるるに 舟のまはるるに

無病信書

信よしの記言のしるしに 紙衣の
芳馬

この句のまはるるに 追悼のしるし
せしむるのしるしに 出づるしるし
今見よまはるるに 舟のまはるるに
一舟のまはるるに 舟のまはるるに
正當のまはるるに 舟のまはるるに
舟のまはるるに 舟のまはるるに

舟のまはるるに 舟のまはるるに

丸筆

⑤

⑤

さし女誰 代ゆさち 糸をらん
月をうつくしく馬溝おく水
藁竹屋家の重なるまきとる
豆腐煮とし美山の家の家
這ゆる水を祖父のかきまよ
流るぬまより六 蛭多急と
きまのげいのせ路のあ苗たし
圓替つりしはむくむひり果

移る世の遊女らあさよ
讀佛菜の因とる
北のさしめをなと出るたゆみ
あまぬし鹿のやうに連れ
藤けの片の糸指水車
さう敷指とけをさうけし
さむむし一断相入も花の
結糸のこころ用しを判

